赤い白球　掌編

神家正成

※　この冊子に収録されている掌編は、『赤い白球』読後に、お楽しみください。

救いの大雨

大雨の日は、心が落ちつく。
ただの小雨では駄目だ。
大雨、それに嵐や台風であればなお、すばらしい。
俺は、手にしたスパナを放りだし、乾いた地面に座りこむ。無造作にあぐらをかき、胸元の物入れからタバコを取りだして、大きなため息をついた。
今年の梅雨は、まだ明けない。例年になく長くなるらしいが、ここ数日はいまいましいことに中休みだ。
空を見る。木々の隙間からのぞく暮れなずむ蒼い空には、夕焼けの朱が混ざりはじめている。明日はいい天気になりそうだ。
――くそったれ。自然に悪態がこぼれる。
先ほど雑に整備をする部下を怒鳴りつけてしまった。日々、あれだけ整備の大切さを説いているのに、伝わらないもどかしさが胸のうちでくすぶる。
いや、奴らだってこんな整備は本当はしたくないのだろう。俺はいら立たしくタバコに火を点けた。
力任せに吸い、大きく煙を吐く。苦い味が身体中を駆けめぐる。

目の前には、俺たち整備員が精魂込めて手入れをした機体が見える。煙を何度も吐き、その美しい姿を惜しむように見つめた。

夕暮れの掩体壕の中は、奇妙なほどに静かだった。

「美しい飛行機だと思いませんか――」

昨晩、ここで少尉に呟いた言葉を思いだす。

少尉の右手には、工具箱が握られていた。彼は慌ててそれを隠したが、俺の言ったことを理解してくれただろうか。

目の前の一式戦闘機――隼は、相変わらず美しい姿でたたずんでいる。

だが、両翼下にぶら下がっている暗灰色の二百五十キロ爆弾は、似つかわしくない。

明日この隼は、ここ知覧から飛びたつ。

大雨の日以外は、何かに取りつかれたかのように続いていた特攻作戦の、最後の一機として出撃する。

大雨や嵐であれば、目標確認が困難になるので航空作戦は中止になるが、明日は晴れの予報だ。

整備責任者である機付長の俺が、手塩にかけて準備したこの機に乗るのは、朝鮮人の若い伍長だった。

まだあどけない顔をしたその伍長は、何度もよろしくお願いしますと、我々整備中隊の整備員に頭を下げた。

その覚悟を決めた凜々しい笑顔を思いだすと、胸のうちにやるせない思いが渦巻く。

タバコを投げすてると、地面に置いたスパナを握りしめ、頭上に振りかぶった。

このまま隼に投げつけ、機体をいじり、飛びたてないようにしたくなる。

だが、だが――。

スパナを持つ右手が震える。

奥歯を激しくかみ締め、目を強く閉じる。

あの少尉だって同じ気持ちのはずだ。誰だって誰かが無駄に死ぬための手助けなんてしたくない。

陸軍と海軍を合わせて三千名以上の特攻隊員が、沖縄の空と海に散った。沖縄戦の大勢は決まったのに、あの伍長は何のために飛び、死ぬのだろうか――。

口中に血の味が広がる。

それを飲みこむと、ゆっくりと息を吐き、右手を下ろした。

目を開けると隼が、朱に染まりはじめていた。

その美しい姿が、徐々ににじみ始める。

俺は両手で地面を何度もたたくと、体を折りまげ、全身を震わせた。

大雨の日は、心が落ちつく。

誰も死ぬことがないからだ――。

北の星

「本当にそれでいいのですか……」
宮城憲司の念を押す声に、私はうなずいた。雪松を救うためには、もうその手しか残されていないのだ。最愛の息子――龍雅を失ったうえに、娘まで巻きこんでしまっては、先祖に顔向けができない。いや自分が生きてきた意義が、なくなってしまう――。
「平壌の妻の山所に埋めてあります。その資料があれば、あの男は取り引きに応じてくれるはずです」離れた場所でこちらを監視している朝鮮人民軍の兵士に聞こえないよう、宮城に近寄りささやく。
宮城は難しい顔をしていたが、やがて息を吐いたのちに、小さくうなずいた。
緊張していた全身が弛緩してゆく。平壌の家からこの朝中国境の収容所に連行されてから、初めて安堵のため息をこぼした。
宮城と最初に会ったのは、息子がビルマで撃墜王と呼ばれだした頃だった。京城帝国大学の理工学部の学生を、平壌郊外の工場へ案内した時に知りあった。息子と野球で対戦したことを知り、驚いたものだった。理由は知らないが、戦争が終わっても朝鮮半島に残っている。今日偶然にも出会えたのは、近くの水豊ダムから収容所に間違って連行された日本人を探しに、ここに来たからだ。

人民軍兵士のせき払いが聞こえた。宮城に最後の願いを託そうと、隠しもっていた金を兵士に賄賂として渡し、話す機会を得たのだった。

「そこまでの資料であれば、あなたも救えるかもしれませんが、それでいいのですか」

私は再度うなずいた。平壌府の役人として務めていた立場を活かし、解放のどさくさに紛れ、日本統治時代の共産主義者などの朝鮮人思想犯手配書一覧を持ちだして隠した。北も南の政府も、喉から手が出るほど欲しい資料のはずだ。

平壌で何度か会ったことのある足利（あしかが）と名乗る男を、収容所で見かけた。あの唇の薄い男なら恐らく取り引きに応じてくれるだろう。

「私は、勝負に負けたのです。それに同胞を売るのに自分だけが生きのこっては……」

言葉が途切れる。私が生まれた時、既に大韓帝国は輝きを失っていた。祖国が滅亡するのを目の当たりにして、私には皇国臣民として生きる道しか残されていなかった。

その道に人生を懸けた。そして破れた――。

――人生も勝負も勝たなければ意味はない。

龍雅と雪松に常々呟いていた言葉が、両肩に重くのしかかる。それを振りはらい、顔を起こして宮城を見て、口角を何とか上げた。

負けたとしても、最後には笑って死にたい。

右腕を強い力でつかまれた。「時間だ」と無慈悲な人民軍兵士の声がする。

「む、娘を……よろしくお願いします」宮城にかけた最後の言葉は、かすれてしまった。

破れた屋根から北の星が見える。私は粗末な小屋で寝転びながら痛む全身を抱きかかえる。宮城と別れたあと、収容所の所長から拷問を受けた。知り合いの米帝主義者の名を執拗に聞かれたが、黙秘を貫いた。殴られ蹴られた体の痛みに、顔がゆがむ。

宮城は私の願いをかなえてくれるだろうか。

――分不相応な願いは持つな。自分の口癖に苦笑いが出る。

子供の幸福を願うことが、分不相応なことならば、この世は何と理不尽なのだろうか。

「龍雅……」死んだ息子の名を、呟く。あいつが特攻を志願して死んだことを、私はいまだに受けいれられない。父さん（アボニム）と言いながらひょっこりと現れるような気がしてならないのだ。少年飛行兵になると言った際に、何としても止めるべきであった。

「雪松……」愛らしい娘の名を口にする。龍雅を死なせてしまった以上、私の命を捧げたとしても娘を救いたい。両拳を強く握ると、懺悔の思いが胸に込みあがる。

悲運の中、死んでいった両親、そして最愛の妻の顔が思いうかぶ。

米英との戦争が始まり、妻が死んだのち、生きる気力がなえた。それでも解放後は新しい時代が来るかもと心を躍らせたが、それも息子の特攻死によって完全に消えた。

戦争がなければ、妻も龍雅も死ななかったはずだと天を恨んだ。

だが晴らすことのできぬ恨（ハン）を抱えて生きるのにも、疲れてしまった……。

両腕で胸をかき抱きながら、妻の名を静かに呟く。

北の星が、にじんで見えた――。

七月一日の朝陽

柔らかな海風が、頬をなでる。

私は車椅子に座ったまま、庭の片隅から七月一日の夜明け前の水平線を見つめていた。淡い朱に染まり始めた空の色が、暗い海を起こすかのように、波頭を白く輝かせる。

大きく息を吸うと、生きている海の匂いが胸に満ちあふれ、悔しさに目頭が熱くなる。

こんなにも平和な海で、あの人は死んだのだ。

せめて最後に見たのは、この美しい海と空であることを願わずにいられない。

沖縄が日本に復帰してすぐ、私たちはこの海の見える家を買い、広島から移り住んだ。それから、あの人が特攻で亡くなった空と海を見るのが二人の習慣になった。ふだんは夫と一緒に海を見るのだが、今日だけは、一人にしてくれる。

連れそって長い歳月が過ぎたが、夫は自らが幸せになることをいまだに戒めているように思える。私にも幸せかどうか一度も聞いたことがない。そんな夫の胸中を思うたびに私の胸は張りさけ、どうしようもない深い哀しみと無念の思いが、全身を激しく貫く。

右手に握った腕時計を見つめる。あの人の形見ともいえるこの古く傷ついた時計は、いつもは夫が肌身離さず身に付けて時を刻んでいる。だけど今日この瞬間だけは、私のものだ。私の願いを込めた千人針は、あの人とともに海に沈んでいる。

目を閉じて、あの人の面影を思いうかべようとする。おぼろげに浮かぶその顔は、二十歳を過ぎたばかりの若い顔だ。もうあの人の生きた倍以上の人生を私は過ごしている。

海風が髪を揺らす。かみ締めた奥歯がうずく。あの戦争で多くの人が死んだ。家族を失った私と夫は、求めるように新しい家族を築きあげた。赤い白球に見守られながら育った一人息子は結婚し、初孫にも恵まれた。赤ちゃんの柔らかな頬に触れ、小さな命の鼓動を感じると、私の胸の中に温かな灯がともり、世の中の全てがいとおしくなる。

そんな当たり前の幸せが、無慈悲に奪われた時代があった。死んでいった人たちは何を願い、何を託したのだろうか……。

足音が聞こえた。いつも私を護り愛してくれる夫が近づいてくる。右隣まで来て、足音が止まる。そばにいるだけで包みこまれるような安堵の想いが、身体中に満ちてくる。目を開けて見つめると、左頬の傷が、黒い陰を描いていた。

夫は、口を真一文字に結び、両拳を強く握りしめ、背筋を伸ばし、懺悔するかのように暗い海を見つめている。細めた眼には何が見えているのだろうか……。

「すまぬ……」

あの人に向けた言葉なのか、私に向けた言葉なのか、寂しい呟きが、こぼれ落ちる。

この人も信じられないくらいの重荷を背負い生きてきた。龍雅（ヨンア）の名を捨て、龍弘（たつひろ）として私のために人生を捧げてくれた。私は緩やかに息を吐くと、うつむいてしまう。

この人の父と愛する妹――雪松（ソルソン）は、私が殺したようなものだ。

過去の話は、おのずと二人ともしなくなった。心ない誹謗や中傷に耐え、お互い傷だらけの体と心をかばい合い、寄りそいながら生きてきた。

それでも子供が生まれ育つにつれ、笑顔が多くなった。時とともにつらく悲しい思い出は薄れてゆき、楽しく幸せな想いが、それらの上に地層のように積みかさなってゆく。

だが消えたわけではない。この人の左頬の傷痕に触れるたびに、心の奥底に沈んでいるつらい思いは湧きあがり、私の心をかきむしる。

でも、それでいいと今は思うようになった。忘れることも怖いのだ。

私たちは、あの人を決して忘れずに共に生きる。忘れることなどできない。たとえそれが死ぬほどつらく哀しいことであっても……。

右肩に夫の左手が置かれた。顔を上げると、夫がぎこちなくほほ笑んでいる。

昇りはじめた朝陽が、夫の左頬の傷を紅（くれない）に染める。

私も夫にほほ笑み返す。言葉にしなくてもお互いの想いは、十分に通じあっている。

私は右手で握っていた腕時計を、夫の左手に静かにはめた。

夫は傷だらけの腕時計を、泣きだしそうな顔で見ていたが、やがていとおしむかのように時計に右手を優しく重ね、眼を閉じた。

私は、そっと心の中で呟く。

――うちは、幸せじゃよ。

七月一日の新しい朝陽が、二人を柔らかく包みはじめた――。

神家正成（かみや　まさなり）
※本書の感想、著者への励ましなどは、下記ウェブサイトやTwitter、Facebook、noteまでお気軽にどうぞ。
https://kamiya-masanari.com/
https://twitter.com/Kamiya_Masanari
https://www.facebook.com/Kamiya.Masanari
https://note.mu/kamiya_masanari

赤い白球　掌編
2021年 8月5日　第1刷発行

著　者：神家正成
発行人：神家正成
発行所：株式会社神家正成
組　版：株式会社神家正成
印刷・製本：神家正成株式会社

本書の無断転載・複製はご自由にどうぞ。喜びます。
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
© Kamiya Masanari 2021 Printed in Japan

ISBN　978-4-969-52488-3　C0193

現代を舞台にした自衛隊ミステリー植木シリーズ3作も宝島社文庫から好評発売中です。
『深山の桜』(2014年2月。アフリカ南スーダンで国際連合平和維持活動中の自衛隊宿営地)と『七四』(2015年3月。静岡県の富士学校と東京)、『桜と日章』(2017年4月。千葉県柏市)。
それぞれ独立した物語の緩いシリーズです。どれから読んでも楽しめます。

関東戦国時代の知られざる二人の姫の戦！

秀吉や家康など迫りくる新しい権威の前に、ふるさとや愛する人を護り通した女子の戦と、それを支えた男たちの、熱くて哀しい物語の『さくらと扇』(徳間書店。1590年～1615年。関東、下野、古河、大坂）も好評発売中です。

全作品が同一の世界観の物語で、幾人か連なる登場人物が出てきます。